

# インド・釈尊あれこれ紀行

## ベナレス



ベナレスのツアーコースの多くは、ゴドリア交差点でバスをおり、ダシャーアシュバメータガートへ向かう

沐浴する人々



世界中からの観光客



ベナレス・ヒンドゥー大学の正門前に立つ著者



ベナレスはカーシー（光り輝くの意味）と呼ばれる、ガンジス河の北西側にあり、西からの支流ヴァルナ川と町の南側からの支流アッシー（かつてはよどんだドブ川だったが、現

インド渡航歴40回超！

## 佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.11



水嵩が高くヒンドゥー教寺院がだいたい沈んでいる時のガート。1958年当時



中央右下に写っている半分沈んだ建物は上のモノクロ写真に写っているヒンドゥー教の寺院。空が白く煙っているのは右奥にある火葬場から立ち上る煙のせい。平成26年筆者撮影

在は流れている)にちなんでヴァラナシと呼ばれる。

ガンジス河の名前 ガンガー Ganga の語源はわからない。

ヒマラヤ山脈の中部を水源としベンガル湾にそそぐ全長2,510km、流域97万5,900キロ㎡、インド最大の河である。伝説ではシヴァ神の頭から噴き出す水がもとで、水源地はガンゲトリ、標高6,614メートルにある谷である。そして、インドのすべての河川は最も聖なる河であるガンジス河につながっていると考えられている。沿岸には多くの聖地がありプリンダバン、アラハバード付近のクンブメラ(お祭りの時は何百万の巡礼者が集まる)が有名である。また、ジャムナ河などと合流して広大な平原を流れ、豊かな農耕地に広がっている。インド文明はこの流域を中心にして東西に広がっていったのである。ヒンドゥー教徒はこの河で沐浴すると一切

聖地ベナレスには修行者が少なくない



ベナレス河畔で毎晩行われる火祭り。かつてはヒンドゥー寺院内で行われていたが、いまは河畔で行われている。



1年に1回行われるインターナショナル ヨーガデー。インド各地で同時に行われ、ベナレスでは河畔で行われる

の罪がなくなり、死んだあとは天国に生まれると信じ、死を待つ人々を受け入れる多くの宿があり、映画の題材ともなっている。

ベナレスの歴史は古く、紀元前6世紀にこの地を首都としたカーシー王国はガンジス河沿岸に16ある大国の内でも最大最強の勢力を誇った。紀元前4世紀にはマウリヤ王朝、4世紀にはグプタ王朝、6世紀にはカナウジ王朝、7世紀前半にはハルシャ王（戒日王）がヴァルダナ王朝の一部を形成した。その後、イスラーム教徒の王朝が何代か続き、18世紀にはイギリス東インド会社の進出によりイギリス領となった。

町を巡るいくつかの巡礼路があり、5ヶ所の聖地と川辺（テイルター）を巡るパンチャテイルタヤートラが一般的な巡礼コースである。最南端のアッシーガート、中央のダシヤアシュヴァメーダガート、最北端の



ベナレスにしかない  
ダンディバラモン。  
持っている竹の棒を地面  
につけることはしない



1959年、留学中にベナレスを訪れた筆者。当時、船代はなく、“無料”だった

## 佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教職をとり、教授、学部長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に「ブッダガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。

アディケーシヤヴァガートを経て南下してパンチャガンガート、マニカルニカガートを回る。

ダシャーアシユバメーダガートには夜、多くの巡礼者が集まり、灯火を鈴の音にあわせてひたすら廻すアールテイの儀式が毎晩行われる。特定の先祖供養もできる。これは日本の施餓鬼会と同じである。そして、プラサーダ（供養）として主に甘いお米をいただける。ベナレスにはダンディバラモンと呼ばれる。ここにしか住まないバラモン僧侶の集団がいる。竹の棒を持っており、決して地面につけてはいけない。今は布の袋に入れているがそれでも地面には置かない。

レスラーと呼ばれる人々の集団もいて、日々の訓練にいとまもない。今日、ベナレス製の絹も質が良いと評判でサリー（女性のまとう布）をお土産にする人も多い。